

お礼の言葉



宮城県知事
村井 嘉 浩

「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」における宮城県の取組につきまして、御理解、御協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

そして、大会本番に先立ち、令和3年6月19日、20日、21日の3日間にかけて県内で行われた「聖火リレー」が、事故や怪我もなく無事に終えることができましたことを、県実行委員会関係者をはじめ、準備や運営に御尽力いただきました全ての皆様に感謝申し上げます。

本県にとりまして今回の聖火リレーは、大会本番に先立って行われるセレモニーという位置付けだけでなく、「復興五輪」が掲げられた今大会の意義を十分に鑑み、沿岸市町と走行ルートを綿密に企画し、東日本大震災で甚大な被害を受けた沿岸地域の復興状況とこれまでの支援に対する感謝の気持ちを世界に発信することを目標として準備に取り組んでまいりました。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行にともない、東京大会が1年延期され、その後も国内の感染が収束しない中での聖火リレー開始となり、公道でのランナー走行を全て取りやめる決断をした自治体もあるなど、全国的にも非常に困難な中での実施となりました。

本県の聖火リレーにおいても、感染防止対策の徹底により、沿道での観覧自粛のお願いや公道走行ルートの一部区間の見直し、式典会場の入場制限などが行われたため、多くの県民の皆様にご覧いただくことができなかったことは非常に残念でありましたが、復興した沿岸部のルートをトーチを掲げて元気いっぱい走るランナーや、「復興支援に感謝」といった横断幕を沿道に掲げる県民皆様の姿を見て、何物にも代えがたい感動を与えていただきました。

さらに、このコロナ禍という難しい状況の中、全都道府県で行われた聖火リレーや今回の東京大会の実現と成功に向けて様々な関係者が取り組まれた努力が、後世に意味のあるものとして語り継がれることを、私自身、強く願うものです。

終わりに、本県の聖火リレーの準備、運営に御支援いただきました関係者、県内市町村、聖火を繋いでいただいたランナーの皆さん、そして安心安全な観覧に御協力をいただきました全ての皆様に心から感謝を申し上げ、私からのお礼の言葉といたします。

令和3年12月吉日

御挨拶



東京2020オリンピック聖火リレー
宮城県実行委員会 会長
宮城県副知事

佐野 好 昭

「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」に先立ち、我が県では令和3年6月19日から21日までの3日間にわたって行われ、280名の聖火ランナーが県内を走り抜け、聖火をつなぎました。この間、おかげさまをもちまして事故や怪我もなく無事に聖火リレーを終えることができましたことは、ひとえに実行委員会構成員の皆様をはじめ、主催者である大会組織委員会、その他準備・運営のために御尽力いただきました多くの関係機関や関係団体の皆様方の御支援と御協力の賜物であり、改めまして心から感謝申し上げます。

さて、本県の聖火リレーは、今大会で掲げられた「復興五輪」の理念に鑑み、震災から10年目の被災地の現状や復興を成し遂げつつある姿、また、聖火リレーを通じて復興支援への感謝を国内外に発信する絶好の機会となるよう、「復興五輪」を体現するルートや聖火ランナーを選定するため、平成30年9月から実行委員会として準備を進めてまいりました。御承知のとおり、世界的な新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、やむを得ず昨年3月24日、史上初の大会延期とともに聖火リレーの1年延期が決定されたものの、その後も国内における感染が収束しない中、聖火リレーは本年3月25日にスタートとなりました。

聖火リレーを実施することで観客による密集・密接の環境を作り得るのではという懸念や、如何に感染対策の徹底が行えるかという新たな課題に全都道府県が直面し、準備は困難を極め、さらには感染状況の悪化により、やむを得ず直前に公道の聖火リレーを全て中止する判断に至った自治体もありました。本県も例外ではなく、感染防止対策のための会場の入場制限、沿道での観覧自粛要請や密回避の呼び掛け、公道ルートの一部区間の中止など、当初計画からの変更を強いられました。そのような多くの関係者の不安と期待が織り混ざった状況での本県の聖火リレーの実施となりましたが、ランナー一人おひとりがそれぞれの特別な思いを抱いて被災地を元気に走行する姿や、沿道において笑顔で手を振る観客の皆様を拝見し、多くの県民皆様と感動を分かち合うことができた意義のある聖火リレーであったと感じております。今回の聖火リレーが多くの県民の皆様にご覧いただくレガシーとして記憶に残り、後世に語り継がれるべきものと感じていただければ幸いです。

結びに、本県の聖火リレーの実施に当たり、当実行委員会の準備や運営にお寄せいただきました多くの関係者の皆様からの御指導と御支援に対して深く感謝を申し上げ、記録誌発刊にあたっての挨拶といたします。

令和3年12月吉日

聖火到着

聖火到着式

○航空自衛隊松島基地(東松島市) 2020年3月20日(金・祝) 11時00分～11時50分

東北3県での「復興の火」展示に先立ち、聖火を迎える到着式が開催されました。

会場となった松島基地は、東日本大震災の際には2mを超える津波に襲われ、その後、隊員の懸命の手作業により発災後3日で滑走路が復旧され、救援物資の輸送拠点として、大きな役割を担った基地です。



聖火は強風の中、聖火特別輸送機「TOKYO 2020号」によって、ギリシャから日本に運ばれました。



オリンピック柔道男子金メダリスト野村忠宏さんと、オリンピックレスリング女子金メダリスト吉田沙保里さんにより聖火皿に聖火が点火されました。



ブルーインパルスによるオリンピックカラーの展示飛行

復興の火

「復興の火」は国が掲げた「復興五輪」の趣旨を踏まえ、東京2020オリンピック聖火リレーのコンセプトである「Hope Lights Our Way / 希望の道を、つなごう。」に沿い、東日本大震災から10年目に、東京2020オリンピック聖火リレーの一環として実施されました。

復興に力を尽くされている被災地の方々に、ギリシャで採火した聖火をリレーに先立ちご覧いただくため、2020年3月20日から3月25日までの間、宮城県、岩手県、福島県の順番で各2日間「復興の火」として展示されたものです。

「復興の火」記念式典(石巻市)

○「石巻南浜津波復興祈念公園」(石巻市) 2020年3月20日(金・祝) 13時30分～19時00分

石巻市南浜地区は、東日本大震災の津波と火災の延焼により500名以上の尊い生命が失われた場所です。その跡地を追悼と復興のシンボルとなる公園として整備し2021年3月に開園しました。

専用ランタンによって航空自衛隊松島基地(東松島市)から運ばれた聖火は、当初、石巻市内の小学生により迎え入れられ、公園内の「みやぎ東日本大震災津波伝承館」において一般展示される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、関係者による聖火到着の記念式典が当該施設で行われた後、隣接する屋外の公園に別途設置された聖火皿に点火され、8000人を超える一般の皆様にお披露目されました。



ランタンを載せている茶色の固定台(上部)は、石巻高等技術専門校の木工科の生徒さんと先生により制作され、白色と赤色の台座(下部)は、今野梱包株式会社(石巻市)により強化ダンボールで制作されたものです。



復興の火



会場となった石巻南浜津波復興祈念公園内「みやぎ東日本大震災津波伝承館」の外観



開会前の会場の様子



森喜朗 大会組織委員会会長（当時） 来賓祝辞



亀山紘 石巻市長（当時）と聖火リレー公式アンバサダーサンドウィッチマン（フォトセッション）



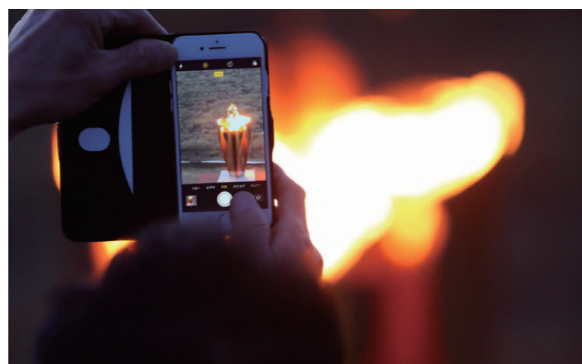
村井嘉浩 宮城県知事と関係者（フォトセッション）



一般公開された聖火皿



聖火皿を撮影する来場者の様子



復興の象徴として会場を照らす聖火

「復興の火」記念式典（仙台市）

○「仙台駅東口エリア」（仙台市） 2020年3月21日（土曜日）13時00分～19時00分

石巻市での展示に引き続き、翌日は仙台市内の「JR 仙台駅東西自由通路東側」で実施されました。新型コロナウイルス感染症対策のため、自由通路内で当初予定していた「復興の歩み」パネル展示は中止し、警備員やスタッフ・ボランティアにより、一定間隔を空けながら観覧いただくよう呼びかけを行いながら、約5万5500人の方々に「復興の火」をご覧いただきました。

東日本大震災発生当時、仙台駅構内は大きく損壊したため県内の主要鉄道機関が利用不能になりました。その後の仙台駅の復旧と鉄道の運転再開は、全国からの被災地支援が拡大するきっかけになりました。



石川宮城県議会議員（当時）と鈴木仙台市議会議員（当時）同席のもと、村井知事と郡仙台市長により聖火皿に聖火が点されました。

復興の火



村井嘉浩 宮城県知事による主催者挨拶



祝辞を述べられる郡和子 仙台市長



関係者によるフォトセッションの様子



仙台駅西口で待機する観覧者



観覧者を誘導する実行委員会スタッフとボランティア



聖火を記念撮影する観覧者



一般公開された聖火皿



メディアや観覧者で賑わう仙台駅東口

聖火リレーの概要

東京 2020 オリンピック聖火リレーの概要

聖火リレーとは、ギリシャ・オリンピアの太陽光で採火された炎を、ギリシャ国内と開催国内でリレーによって開会式までつなげるものです。オリンピックのシンボルである聖火を掲げることにより、平和・団結・友愛といったオリンピックの理想を体現し、オリンピックへの関心と期待を呼び起こす役割を持っています。

東京 2020 聖火リレーのコンセプト

Hope Lights Our Way / 希望の道を、つなごう。

支えあい、認めあい、高めあう心でつなぐ聖火の光が、
新しい時代の日の出となり、人々に希望の道を照らしだします。

当初計画では、2020年3月26日から聖火リレーがスタートする予定でしたが、世界的な新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、史上初の大会延期とともに、聖火リレーも1年延期されました。

そして改めて、東京2020オリンピック聖火リレーは、2021年3月25日福島県・ナショナルトレーニングセンターJヴィレッジでスタートし、日本全国47都道府県を121日間をかけて巡りました。

47都道府県その他、スポンサー企業や組織委員会において選出された幅広い立場やバックグラウンドを持った約1万人の聖火ランナーが、それぞれの思いを胸に聖火をつなぎました。

東京 2020 オリンピック聖火リレー 宮城県での実施について

宮城県での聖火リレーは同年6月19日(土曜日)から6月21日(月曜日)の3日間で実施され、総勢280名の聖火ランナーが、約200mずつ、ゆっくり走る程度の速度で走りながら、16市町村で聖火を繋ぎました。

東日本大震災からの復興オリンピック・パラリンピックを体現するルートとして、津波被害の大きかった沿岸部の市町を中心にリレーを通じて復興状況と宮城の魅力を発信し、各日の最終区間では聖火の到着を祝う「セレブレーション」が実施されました。

また、新型コロナウイルス感染症対策として、組織委員会が定める「東京2020オリンピック聖火リレーにおける新型コロナウイルス感染症対策に関するガイドライン」に基づき、ライブ配信による自宅での観覧推奨や沿道における密回避の呼びかけ、関係者の体調管理、セレブレーション会場等の入場制限等の対策を講じた上で、宮城県における聖火リレーは、一部区間を除き公道にて聖火リレーが実施されました。